

最優秀論文

●テーマ：「自分の可能性を信じるとは」

●氏名：東京都加住中学校 瀬戸 秀一(初段)

私の帯には「不撓不屈」の文字が刻まれています。「どんな困難にもひるまずくじけない」不撓不屈の精神こそ、私の修練のテーマであると考えています。

私には生まれつきのハンディキャップがあります。右手には親指が無く、あとの4本の指も曲がりにくいので、拳をつくることができません。両足にも軽度の麻痺があり、生後4ヶ月で始めたリハビリは、今でも欠かせませんし、日常生活の中でも突然足が緊張し、動かさなくなることもあるのです。

学校の体力テストでは、毎年、「E判定」。運動部に入部するなど考えたこともありませんでした。実際、体験入部した際も、厳しい練習についていけるとは、到底思えず、先輩たちのような演武は、夢のまた夢でした。そんな私が今日まで3年間続けてこられたのは、顧問の前田先生が私の可能性を信じ、指導し続けてくださったからです。

少林寺拳法は、同時に、良き出会いを私に与えてくれました。入部半年を迎えた十月に開催された八王子市民大会に『親子・複合の部』に一緒に出場しよう」と、前田先生は言ってくださいました。

大会当日、前田先生をコートで待っていたときです。同じ部門で出場する八王子北道院の丹木道院長が、「君の顧問の先生は、どんな人も少林寺拳法によって鍛えることができることを、君と一緒に証明しようとしてくれているんだよ」と、私に語りかけてくださいました。この出来事は、私が少林寺拳法を続けるうえでの使命として強く心に刻まれました。

そして、2016年10月。私は「少林寺拳法全国大会 in おおいた」の「障がい者の部」に、先輩や仲間とともに、東京代表として出場することができました。そこで一人の視覚障がいを持つ拳士と出会いました。

介助者の手拍子にあわせ、その方の演武が始まった瞬間、私の心は震えました。

命の奥底から湧き上がってくるような氣勢と気合、そして力強い突きと蹴りの連続。演武そのものへの深い感動とともに、私自身が自分の「可能性」をもっともっと信じ、挑戦しなければならないと感じたのです。

以来2年、下肢麻痺のため、初めは下段までしか上がらなかった蹴りは、中段までになるようになりました。

そして昨年11月の関東中学生オープン大会では、初めて組演武で5位入賞を果たすことができたのです。さらに、今年四月、念願だった初段の許可を戴くことができました。

今、私の所属する加住小中学校少林寺拳法部では、小学5年生から中学3年生まで40人の部員が修練に励んでいます。

私はいつも思います。「誰よりも、ひたむきに修練に励む姿を伝えることが僕の統制としての役目だ」と。少林寺拳法の修練を通し、私は生涯自分の「可能性」を信じ、私が果たすべき「使命の道」を進んでいきます。

以上